

東京 2020 大会の文化プログラムを先導する都のリーディングプロジェクト

東京キャラバン2016



2015年に行った「公開ワークショップ」の様子（撮影：井上嘉和）

オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典でもあります。^{*1}「東京キャラバン」とは、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトとして、劇作家・演出家・役者である野田秀樹の発案により、多種多様なアーティストが出会い“文化混流”することで、新しい表現が生まれるというコンセプトを掲げた新たなムーブメントです。2016年夏、オリンピック開催に湧くりオデジャネイロで、才能溢れる様々なジャンルの日本人アーティストが、現地のアーティストと出会い、国境、言語、文化や、それぞれのジャンルを超えた文化混流ワークショップを行い、創作します。そして、ブラジルを出発点とし、東京キャラバンは2016年より、福島、宮城、さらに国内外各地に出現し、「文化サーカス」を繰り広げていくとともに、国や地域を越えた交流を、継続的に図っていきます。

(*1) オリンピック・パラリンピックの「文化プログラム」

オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典でもあります。国際オリンピック委員会（IOC）の「オリンピック憲章」には文化プログラムに関する条項があり、「OCOG（オリンピック競技大会組織委員会）は少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すものとする。当該プログラムはIOC理事会に提出し、事前に承認を得なければならない」（第5章・第39条）と定められています。東京大会では、スポーツ競技に先立ち、リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック競技大会後から2020年までの4年間にわたり開催されます。

参考文献：公益財団法人日本オリンピック委員会「オリンピック憲章 Olympic Charter 2015年版・英和対訳（2015年8月2日から有効）」

■お問い合わせ

東京キャラバン広報事務局 森 明暁子 090-8811-4373 press@tokyocaravan.jp
奥野 将徳 080-5685-6159 press@tokyocaravan.jp
※その他、プロジェクト全般に関しては 東京キャラバン制作 丹 典子 info@tokyocaravan.jp

■主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）



東京都

ARTS COUNCIL TOKYO



「東京キャラバン」とは？



2015年に行った「公開ワークショップ」の様子（撮影：表恒匡 | SANDWICH）

野田秀樹が提唱する「人と人が交わるところに『文化』が生まれる。」というコンセプトに賛同する多種多様なアーティストが出会い、国境／言語／文化／表現ジャンルを超え“文化混流”ワークショップを行い、共に創作していく中で、新たな生き生きとした「文化」が生まれる。そうして生まれた「文化」を持って、日本全国をキャラバンして回ることで、各地においてまた新たな「文化」が生まれていく… そんな文化ムーブメントが「東京キャラバン」です。

東京 2020 オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する都のリーディングプロジェクトのひとつとして始まった本プロジェクトの第一歩として、2015年、野田秀樹とともに、現代アーティストの日比野克彦、彫刻家の名和晃平が呼びかけ、演劇・美術・能・ファッション・伝統芸能・現代アートなどが一堂に会し、駒沢オリンピック公園のステージにて「公開ワーク



2015年に行った「公開ワークショップ」の様子（撮影：井上嘉和）

ショップ」が実施され、大きな反響を呼びました。

2016年の東京キャラバンは、さまざまな土地で出会った人々とともに、この先の未来へと続く、文化の種を育てていききっかけとなる取り組みを行います。リオデジャネイロ 2016 オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、8月にリオデジャネイロにて現地アーティストを交えた“文化混流”ワークショップを行い、9月には福島および宮城にて現地アーティストや子供たち、伝統芸能の担い手らとともに、さらなる“文化混流”ワークショップを行う予定です。これらのワークショップを経て創作されたパフォーマンスが、10月の六本木アートナイトのメインステージにて公開されます。この活動は 2017年以降も継続し、東京 2020 大会へ向け、さらに活動を充実させながら、全国各地にてワークショップおよび公演を実施し、東京 2020大会以降の文化的な基盤を創ることを目指しています。

「東京キャラバン」コンセプト

「必要なのは、今、2020年に向けての『物語』、そして、その『物語』が2020年を越えても続いていけるような、そんな『物語』を作ることではないのか？ 1964年の東京オリンピックには、これで戦後が終わっていくのだ、日本がいよいよ世界に向かって復帰できるのだ、といった確固たる物語があったように思う。今回の東京オリンピックには、今、日本人を動かすべき、そうした大義名分のような『物語』を簡単に見つけることは難しいだろう。ただ、ある程度の大きさの『物語』を積み重ねることで、人々の「気運」を作ることにはできる。

そして、盛り上がっていった「気運」の中からは、壮大な物語は生まれないと思う。（中略）そして、この東京キャラバンが日本中にばらまいた、目の前にある文化＝ライブの面白さ。それを経験した小さな子供たちの心の中に種は撒かれる。インターネットの普及で偏りがちになった文化とは、全く違う姿、目の前で息をしている人間が生み出す文化への興味を示してくれるようになり、その中から、新たな形態の文化を生み出すとき、この「東京キャラバン」という物語は、本当に壮大な物語になるだろう。」

野田秀樹（「東京キャラバン」構想より）

「東京キャラバン」2016 開催概要

東京キャラバン in RIO

期間：8月18日～8月21日

参加アーティスト：

東京スカパラダイスオーケストラ(ミュージシャン)、
津村禮次郎(能楽師・観世流シテ方)、井手茂太(振付家・ダンサー)、
“東京キャラバン” アンサンブル、原 摩利彦(音楽家)、
野田秀樹(劇作家・演出家・役者・東京芸術劇場芸術監督)、
Arto Lindsay(ミュージシャン・プロデューサー)、ブラジルのアーティスト

<リオワークショップ>

ブラジルと日本は地球の裏側に位置する。その地球の裏側からやってきた日本のアーティストたちが、ブラジルで活動するアーティストたちと、ワークショップを行い、音楽、演劇、身体表現、伝統文化など、それぞれの文化が交じりあうことで生まれる、新たな表現を創作する。東京キャラバンの“文化混流”のコンセプトに共感し、今回、東京キャラバンに初参加となる東京スカパラダイスオーケストラや、リオデジャネイロ在住のアーティスト Arto Lindsay 氏の呼びかけにより、ブラジルの多種多様なアーティストらが集い、オリンピックの熱狂に湧くリオデジャネイロで、日本 × ブラジルの“文化混流”ワークショップを行います。

野田秀樹によるステートメント

日本語の「文」という文字と「交」という文字を見比べて欲しい。日本語がわからない人でも、二つの文字が似ていることは、お分かりになるだろう。

「文」は、文化の「文」であり、「交」は、交通の「交」である。

この東京キャラバンは、「文化とは、交通なのである」という想いからつくられた「文化旅団」=「文化サーカス」である。いろいろなところを行ったり来たりしながら、文化というのは、生き続けていくという想いだ。だから、このたびも、オリンピック真っ盛りのリオデジャネイロに出発して、リオのアーティストたちと、しばし「交」わり、その出会いで生まれた、新たなものを、東京に、日本に持ち返る。そんなことをしているうちに、いつの間にか、新たな生き生きとした「文化」が、また生まれていくのではないか。「文化」とは、そんな生き物のような気がする。

このたび東京からは、東京スカパラダイスオーケストラと、身体性に優れたパフォーマーたちがこのリオにやって来た。

リオと東京は、地球の真反対に位置する。だから、足元の地面を掘り続ければ、きっと出会う。そんな子供の頃の妄想を出発点に、「地球の反対側に向かって掘る」をテーマに、地球の反対側の東京からやって来たアーティストたちと、このリオのアーティストが出会う。そこで何が生まれるか。

このたびの東京キャラバンはそのことに賭けてみたい。

東京キャラバン in 東北(調整中)

期間：2016年9月上旬(調整中)

参加アーティスト：

東京スカパラダイスオーケストラ(ミュージシャン)、
津村禮次郎(能楽師・観世流シテ方)、
“東京キャラバン” アンサンブル、
野田秀樹(劇作家・演出家・役者・東京芸術劇場芸術監督)ほか

ワークショップ開催候補地(調整中)

福島 & 宮城
・福島県 相馬市内
・宮城県 仙台市内

<福島 & 宮城ワークショップ>

東京キャラバンのコンセプトである、「人と人との出会いによる“文化”創造」をもとめ、東京キャラバン参加アーティストらが、リオを出発し、日本全国津々浦々にキャラバンし、文化サーカスを開催するための最初の第一歩として、震災により甚大な被害を受けた福島や宮城に赴き、現地のアーティストや、学生、子供たち、そして継承が困難な伝統芸能の担い手ら、各地のお祭り等の文化と出会い、交わり、新たな表現を模索する。

東京キャラバン in 六本木アートナイト

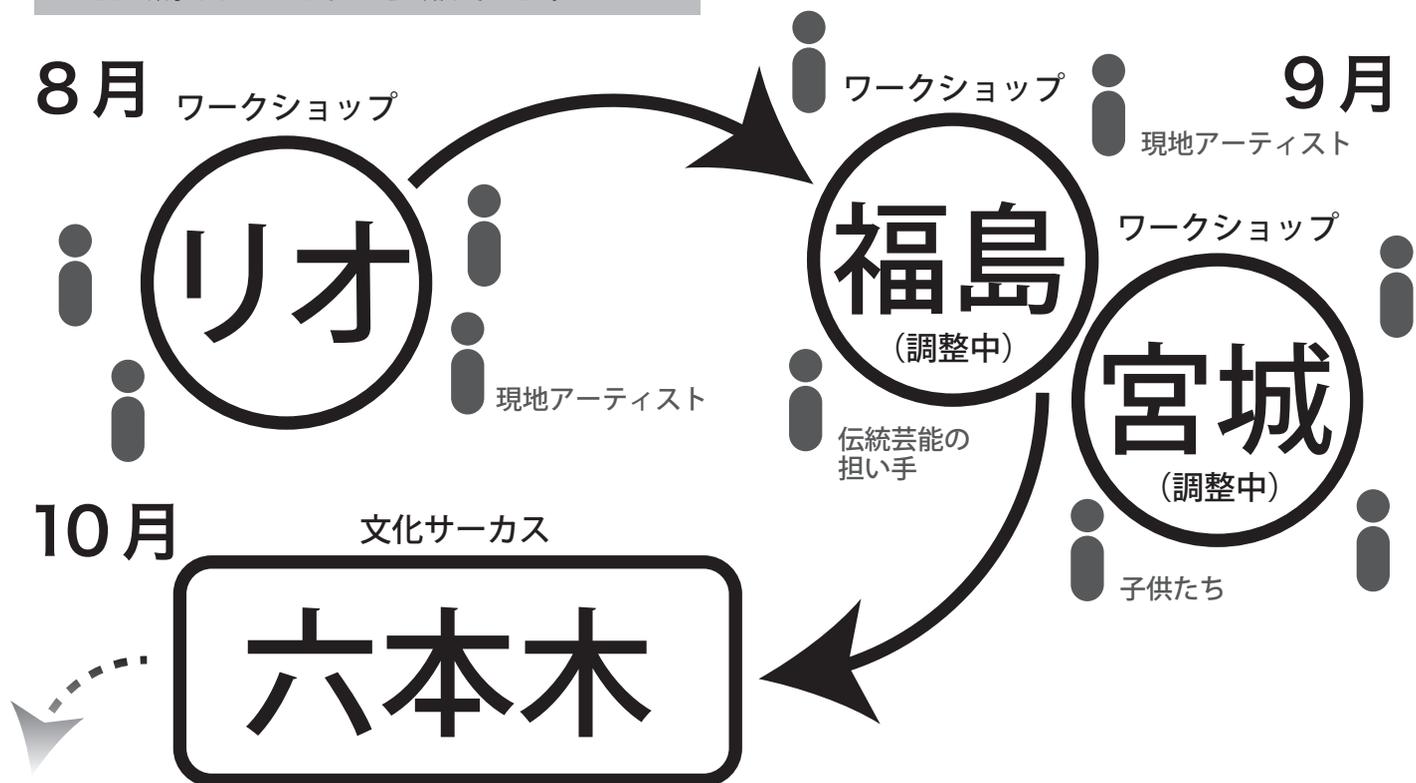
期間：10月21日～22日

参加アーティスト：

東京スカパラダイスオーケストラ(ミュージシャン)、
津村禮次郎(能楽師・観世流シテ方)、
“東京キャラバン” アンサンブル、原 摩利彦(音楽家)、
野田秀樹(劇作家・演出家・役者・東京芸術劇場芸術監督)ほか

<東京キャラバン in 六本木アートナイト>

オリンピック開催中のリオデジャネイロでの“文化混流”によって生まれた「東京キャラバン in RIO」、そしてブラジルから地球の裏側、日本へ凱旋し、「東京キャラバン in 東北」を福島、宮城にて行い、現地でのワークショップから生まれたパフォーマンスを、2015年の「東京キャラバン～プロローグ～」と融合し、さらに進化した「東京キャラバン2016」として六本木アートナイトのメインアリーナでのパフォーマンスとして展開します。



アーティスト・プロフィール



野田 秀樹

1955年、長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に「劇団 夢の遊眠社」を結成。92年劇団解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来、次々と話題作を発表。脚本・演出を手掛けた、歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』『野田版 鼠小僧』『野田版 愛陀姫』では故 中村勘三郎丈と組み、好評を博した。ロンドンやタイ、韓国など、海外の役者とも積極的に創作活動を行い、国内だけでなく、海外でも精力的に作品を上演する。2015年、モーツァルト歌劇『フィガロの結婚〜庭師は見た!〜』を演出、全国10カ所で上演。2016年NODA・MAP第20回公演『逆鱗』は東京、大阪、北九州で上演、6万人を動員。09年名誉大英勲章 OBE 受勲。09 年度朝日賞受賞。11年紫綬褒章受章。NODA・MAP 第 21 回公演となる、新作公演を2017 年早春に控える。



津村 禮次郎

観世流シテ方 観世流緑泉会代表。重要無形文化財（能楽総合）保持者。1942年北九州市生まれ。一橋大学在学中に女流能楽師の草分け津村紀三子に師事、その後先代観世喜之に師事する。緑泉会定例公演、小金井薪能公演のほか、仙台、福島、佐渡での活動も 30 数年以上継続する。古典に留まらず創作活動、海外公演、演劇やダンスとのコラボレーションも多い。昨年はドキュメンタリー映画「躍る旅人・能楽師津村禮次郎の肖像」が公開された。著作に「能がわかる 100 のキーワード」「能狂言図典」、写真集「舞幻」。



東京スカパラダイスオーケストラ

「東京に集う僕らが、世界中から東京という都市に集まってくるさまざまな音楽を吸収し、自分たちのものにし、最高にパラダイスでハッピーな音楽を奏でるオーケストラ（バンド）！」

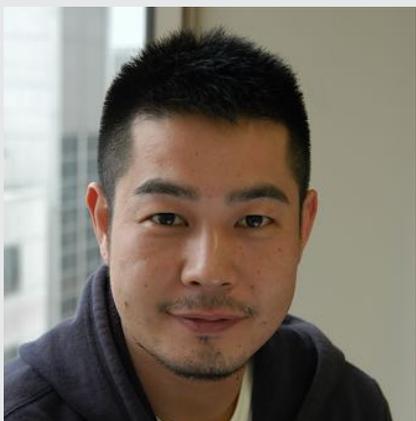
1989年デビューから現在に至るまで 27 年間、ジャズ、ロック、歌謡、ソウル、ファンク、パンク、映画音楽などさまざまな音楽ジャンルをとりこみながら、東京という都市の空気を吸い、東京から発信ということに拘り、進化し続けている。「日本人アーティスト」という枠組なしで、海外で長年活躍しているポップアーティストはスカパラをおいて他にいない。日本から唯一アメリカ最大のロックフェスティバル「コーチェラ」のメインステージに出演したアーティストであり、その他欧米、中南米の世界的な音楽フェスを総なめしている。

2015年デビュー 25 周年を機に、自分たちが音楽によって得ることができた未来への希望や勇気をもっと多くの人たちと共有できないかと、国内、海外のツアー先で子供たちを対象としたワークショップを始める。



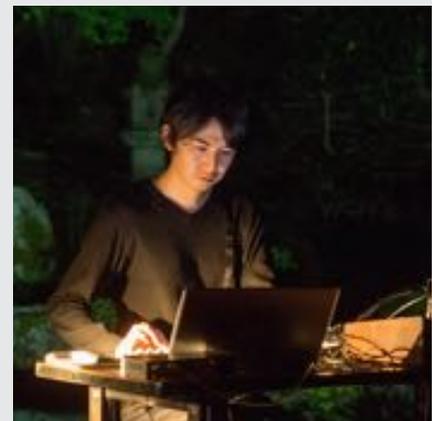
アート・リンゼイ

1953年 5 月 28 日アメリカ・バージニア州生まれのアーティスト / ミュージシャン / プロデューサー。1977年にニューヨークで DNA を結成し、翌年ブライアン・イーノによるプロデュースのもとで制作されたコンピレーション・アルバム「No New York」に参加。1978年にはジョン・ルーラー率いるグループ Lounge Lizardsに参加し、80年代にはピーター・シユラーと Ambitious Lovers を結成し、アルバムを3枚リリース。その後プロデューサーとして Caetano Veloso、Gal Costa、Marisa Monte などの作品に関わり、また坂本龍一、David Byrne、Laurie Anderson、Animal Collective、Cornelius、UA、大友良英など数多くのアーティストと共演。また Mathew Barney、Vito Acconci、Rirkrit Tiravanija など数多くの現代アーティストとのコラボレーションも行う。現在 12 年振りとなるソロ名義の新作を制作中。



井手 茂太

振付家・ダンサー。1991年にダンスカンパニー「イデビアン・クルー」を結成。既存のダンススタイルにとらわれない自由な発想で、日常の身振りや踊り手の個性を活かしたオリジナリティ溢れる作品を発表し、国内をはじめ、ドイツ、フランス、イギリスなどの 23 都市、のべ 34 箇所作品を上演。また演劇作品へのステージングや振付、CM・ミュージックビデオの振付や出演など、幅広いジャンルでも活動する。



原 摩利彦

音楽家。京都大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科修士課程中退。質感 / 静謐を軸に様々な形態の作品を制作する。アルバム《Flora》(night cruising, 2013)、室内楽曲《Night-filled Mountains》(京都芸術センター, 2014)、サウンドインスタレーション《Copyright #1 : Showcase》(芦屋市立美術博物館, 2016) を発表。坂本龍一氏との即興セッション (NHK-FM, 2014) も行う。ダムタイプ高谷史郎プロジェクト・メンバーとして《ST/LL》(音楽: 坂本龍一との共同制作)、《CHROMA》に参加。ダムタイプとしてインスタレーション作品《MEMORANDUM OR VOYAGE》、《Trace/React》(東京都現代美術館, 2014) を発表。また、ダミアン・ジャレ + 名和晃平《Vessel》、野田秀樹《東京キャラバン》、寒川裕人《sansui》など、舞台や映像作品の音楽も担当。